



第70号
平成20年(2008)
1月20日発行
(年4回発行)

国民文化祭

青木秀樹

今年の国民文化祭連句大会は十一月二日三日に徳島市で開催された。久方ぶりの県庁所在地での開催で、七年前の徳島連句懇話会発足以来の地元での連句活動、その実績を踏まえた県実行委員会への働きかけの成果であった。大会開催は多くの方々地道な活動があつて成り立つことを再認識した。その連句大会は前夜の交流会には二七〇名、連句実作会には小中学生・高校生を合わせて三二〇名が参加する盛会、四十九席に分かれての連句大会は壮観であつた。

今回の募吟は歌仙であつたが応募作品は五八三巻、十二名の選者により文部科学大臣賞以下十五作品が大賞に、入選作品総数は一九八巻であつた。猫蓑会会員の捌き作品は、鈴木千恵子・鈴木了齋・登坂かりんの三君が大賞に入賞、入選以上は二十二名、四十一巻

であつた。選者がそれぞれの連句観、審査基準により応募作品を評価した結果である。

国民文化祭の募吟作品の評価は、選者がそれぞれ特選三巻、秀逸十巻、入選十七巻合計三十作品を選び、その合計点で順位をつける方式である。上位入賞の文部科学大臣賞作品は四名、国民文化祭実行委員会会長賞作品、徳島県知事賞作品は五名ずつが高点をつけた結果である。選者全員が揃つて高く評価したものではない。今回の選の結果をみると入選以上の昨品の共選作品は八九巻で入選作品の半数を下回っている。いかに選者が独特の基準で評価しているかが分かる。

今回の評価を総括すると、蕉風連句のあり様を基準とする選者と、懐紙式歌仙の式日よりも現代の詩性・新しさを重視する選者に分かれたようで、とくに上位入賞作品にその傾向が顕著であつたように感じる。

私も選者をお引き受けて、六月七月の六十日間、明雅先生のなさつていたように、応募全作品を少なくとも二回は読んだ。はじめは付け転じの秀逸な部分には○、障りのある部分には×、意味不明・付け味不明の部分には？をつけて、再読して吟味した。その結果七十五作品が予選通過となつた。その中から一巻の構成、特に序破急と流れにメリハリのあること、さらに付け合いに新しさのあることを重視して入選作品に選んだ。面白さがあつても、瑕の多い作品は生理的に気持ち悪

く落とすことになつた。

私のいう「新しさ」は世態人情諷交詩としての新しさであり、付け合いの意外性や観祭の鋭さを表すものである。現代詩などに見られる象徴性の高いフレーズや抽象的なフレーズは付け味が悪く、一巻の流れを阻害するだけであり、「新しさ」とは無縁である。

連句は本来連衆のものであつて、作品を集めて優劣をつけること、特に文部科学大臣賞などをもらうことに批判的な方がいる。連句協会は連句普及活動の一環、連句人の励みになるとして、理事会での論議の上で募吟に協力している。上位入賞に関しては数名の選者の評価により決するという評価方法上の問題点があるものの、多くの応募者は自分たちの作品を他者にみてもらいたい、他者から評価されたいという願望から応募している。初入選した初心者から「手探りで行なってきた自分たちの連句が他者に認められた」という喜びの声が寄せられている。連句の普及・向上の励みになつていくことの証であろう。現在、入賞狙いの文音の多いこと、応募作品の多くが連句の基本を知らないのではないかと思われるレベルにあることは嘆かわしい。

私は「連句は座で楽しむもの」ということを基本としており、その上で「印刷して残す作品は式目を弁え、かつ現代の連句として優れた作品であること」をめざすべきだと思つている。

歳旦三つ物 東明雅

三つ物とは、

① 一巻中の巻頭の発句、脇、第三の三句を言った。

② 発句、脇、第三の三句形式を言う。

一般的な発句、脇、第三の表ぶりの作法によるものと、表合のように一巻の素材的な変化を、できるだけ三句中に盛り込もうとするものがある。

歳旦三つ物は歳旦を祝う意で作られ、貞徳の時代に始まり、正月吉日、宗匠の宅に集まり、三つ物を作り、披露するのを歳旦開き、歳旦開き当日の句帳を歳旦帳といった。

作り方

- ① 発句・脇・第三の形式はそのまま守ること。表六句の禁忌は解除し、神祇、釈教、恋、地名、人名なども積極的に取り入れ、三句の中により広い世界を表現すること。
- ② 新春を祝うめでたい気分であること、述懐、無常などの意は避けること。
- ③ 発句、脇は新年、第三は他季（春が最も適当）か、又は雑にすること。

尋常の百韻の、口三句引出でたる類にては、歳旦三つ物の手柄なし。たとえば小車のきびしく廻ることし。只三句に百句千句の活をこ

むるなり。

「篇突」 森川許六

三方和合と言うことで、天・地・人を考えて作るとか、内、外、その年の干支や、勅題を使うということもある。

「新年に新年を付け、第三は雑でもなんでもよいが、おおかた春を付ける。ただし、なるべく春という字を使わないで、春の気分が出るように考える。無常、述懐は使わないこと」

根津芦丈翁口伝

歳旦帳は最初宗匠の手書きだったが、寛永年間の後期に、印刷にすることが一般的になり、歳旦集が出版されるようになった。「歴代滑稽伝」に「井筒屋故庄兵衛この人 貞徳につかふ。貞徳命じて三つ物所に定む」とあり、京都の俳諧書肆井筒屋が一手に引き受けていて、「京板」として刊行、年頭の縁起物に販売した。享保（一七一六〜一七三六）以後は各宗匠が、それぞれ趣向を凝らし様々なスタイルで出すようになった。町には歳旦売りが出る程になり、「俳諧歳時記栞草」には「高声に『連歌俳諧の三つ物』と呼んで町を往来す」とある程であった。

御成人の君に来てあふや千代の春 貞徳

粧り竹にもわたる唐鳥 正章

鍬入るる苗代に小田の土肥えて 西武

明くる夜もほのかに嬉し嫁が君 其角

歌留多の札に一筋の髪

はだれのにゆくへもしらぬ舟こぎて

年棚のかけよりちらと嫁が君 明雅

初茜いま染むる軒先

苗木より育てし梅の花待ちて

（干支は子年 勅題は苗木）

書初や半切拵ぐ緋毛氈

嫁が君乗る俵置物

行く船の一路平安祈るらん

穏やかな世であれかしと屠蘇の盃

昔氣質が墨書年玉

月のいろ冴えたる樹々に風立ちて

還暦のねずみ詣でる大旦

ほろにがき恋初礼の膳

海よりの一灯淡く霞むらん

「連句辞典」

「ACC講義録」より転載

頌春 二〇〇八年元旦

歳旦三つ物

生庵秀樹

あれこれと願ひは多し初詣

大黒鼠ねらふ年棚

紅枝垂若木すくすく育ちあて

臥猫庵千町

うまし国初東雲に明けにけり

恵方詣は子の日子の年

文音に花も見ごろと誘はれて

房連庵麻子

八十の関越えて子年や屠蘇酌まむ

ごまめ・きんとん・帆立・伊達巻

花咲けば海に入る川きららかに

緑華亭孝子

こまやかに俎始めねずみ歳

さらさら雪にかはる御降

火の国の花ふり拂ふ男めて

梅香庵久美子

年明くる源氏物語千年紀

十二単衣を纏ふ初夢

巢立鳥飛びゆく方を指さして

涼月庵あかり

海原を分けて続くや恵方道

初茜濃くとまる瞬き

乱れ箱春の小袖を右肩に

久慈庵弘子

夢一つ書き加へたる初日記

囲炉裏でたぎる福茶福鍋

花の下老若男女集ふらん

冬霞庵淳子

あかつきの梁走りゆく嫁が君

夫婦箸取る喰積の膳

花吹雪旅立つ人のはなむけに

貝母亭清子

初雀弾みたるあとことばあり

伊呂波小紋の春著着る人

日のうらら傘寿いくつか越えもして

袖菊亭好敏

高層街踏んまへ昇る初日かな

年酒満々大振りの猪口

ジャスミンの香り馥郁立ち込めて

爽楽庵路子

七たびの干支に会ひけり明の春

嫁が君らと酌み交す屠蘇

異国語の飛び交ふ御苑花満ちて

朱鷺庵文子

戦無き世を願ひけり年新た

瑠璃の虚空に浮かぶ初富士

花に舞ふ鬘履役者に声掛けて

(名簿順)

第二十八回俳諧芭蕉忌

平成十九年十月十七日

於 江東区芭蕉記念館

役割

宗匠	橘	文子
脇宗匠	近藤	守男
副宗匠	久保田	庸子
執筆	鈴木千恵子	
知司	鈴木	了齋
副知司	武井	雅子
座配	遠藤	央子
座見	永田	吉文
花司	横山	わこ
香元	秋山志世子	
配硯	棚町	未悠
〃	内田	遊民
老長	原田	千町

第二十八回俳諧芭蕉忌

脇起り二十韻

けふばかり人も年よれ初時雨
 残る紅葉の鮮やかな色
 教室に吾子の自画像貼られぬて
 混声合唱ハーモニー良く

翁 秀樹 守男 庸子

ウ
 パイロット窓の真横に月を見る
 かつて新絹運ばれし路
 どんぐりの独楽を渡したかはいい娘
 エキゾチックな巻き毛なでられ
 イギリスの古城の鍵は錆びついて
 改造内閣変り映えなし

千町 雅子 アンズ 恭子 了齋 央子

ナオ
 やさしさは武器にはならず酌む冷酒
 月射す森に青葉木菟鳴く
 寺の町迷ひまようて西は何処
 五体揃った愛の亡骸
 釣針にダイヤモンドが光ってる
 タロットカードクインにつこり

わこ 志世子 政志 未悠 常義 遊民

ナリ
 棋聖戦一手一手にある妙手
 老あたたかに残る食欲
 夢に見し秘境の花にめぐり逢ふ
 無重力かに舞へる蝶々

吉文 忠史 文子 執筆

明雅忌脇起二十韻

「秋燕」

市野沢弘子 捌

秋燕翁の跡を辿るなり
 名残の月のかかる山の端
 持ち寄りの弦の調音身に入みて
 パイ八つ切りに淹れる珈琲
 次々と風紋生るる砂の丘
 閉ぢ込められし女悶へる
 墨染めの尼御の過去は問はぬまま
 相槌のごと落とす梅干

明雅仏 弘子 泉子 美奈子 士郎

ウ
 汗一斗トライアスロン走り切り
 背水の陣ボケキヤラの人
 ナオ
 幕間の楽屋に届く土地の酒
 半蔵門には今も銭湯
 とくそくの公共料金振り込んで
 凍てる両手をあたためてやり
 つららごし二人で仰ぐ青き月
 電車の中で化粧などだめ
 ナリ
 ならめっこついに猿から笑はるる
 修行に長き土佐遍路道
 花の下誰が忘れしか錫の杖
 春の絵日傘廻す幼等

奈 泉 奈 泉 士 泉 士 泉 士 泉 士

連衆 青木泉子 鈴木美奈子 横井士郎
 青島ゆみを

「よんぱんや」

原田千町 捌

とんぶりや座敷童子の笑ふ声
小望の月の登る頃合
秋のセル路面電車を乗り継ぎて
ガイドは右手左手で指し

俳諧の大道無門白桔梗
人集ひ来る床間に月
いつしかに餌付けの雀蛤に
夢語る子の瞳明るく

龍胆の藍は空より滴るか
瀧つ瀬の橋かかる残月
文化祭衣裳合はせのにぎやかに
ポストから出すダイレクト便

籠網に越前蟹のあふれをり

船頭の竿操りて渋き唄

胸躍るスイス鉄道旅プラン

細雪舞ふ吾のふるさと

照代

映画のロケかベネチアの路地

未悠

聖母の前で誓ふ純愛

英子

キャンパスに気になる女の白い顔

晃一

愛してただけなら言へる五カ国語

ズ

恋敵こっそり覗く裏扉

巳

サンバのリズム揺れてゐる乳

史

本気にされぬ幼さのゆゑ

樹

三島由紀夫の長きもみあげ

達

副大統領密書隠して外遊に

恭

冷奴木綿好みて酌み交はず

庸

ベランダですくすく育てるペセリです

靖

成層圏の空気透明

晃

蜥蜴ちよろりと岩に隠れる

樹

銚釐に入れた冷酒をつぐ

英

ナオロボットに掃除洗濯まかせきり

雅

ナオサルコジの外交あれこれ噂され

悠

ナオ町筋に銭湯もある古い町

靖

三社祭りにそろふ三代

同

給油疑惑に妖怪の影

ズ

丹下左膳のビラが高値に

巳

鮎食ひねえ月を肴の与太話

恭

献金をうんとはづんで懺悔台

庸

女形外連色修行道中記

達

あたしひたすら燃え尽きるまで

代

セーター完成相手変はりて

碧

早くおいでと肩布団はね

英

愛人に国を滅ぼす王の恋

史

別れ癖親子三代月凍る

樹

蒸鮮を食べてとんぼり月の友

巳

セーヌの流れいまもゆるやか

雅

消したいところ消せぬ消しゴム

悠

いつのまにやら帰る飼猫

靖

ナウ石畳莞条の効かないシトロエン

晃

ナウ先生の目が笑ってる鼻眼鏡

ズ

ナウ語らせば素養豊かな祖父なりて

英

白鳥帰る夢ばかり見る

恭

流水の海踊るクリオネ

樹

つひこじらせた春の感冒

同

師の君と西行の花尋ねにし

町

ピアノニッシモの協奏曲に花満つる

悠

義仲寺に香り伝へる花の風

豊

友と歩まむ丘の麗日

代

山に向ひて飛ばす風船

庸

記念写真は山笑ふ中

達

連衆 式田恭子 根津忠史 武井雅子

連衆 松島アンズ 青木秀樹 久保山庸子

連衆 篠原達子 関口靖子 島村曉巳

竹村照代 谷 晃一

棚町未悠

佐古英子

「高麗郡」

登坂かりん 捌

袖薫る門ひろびろと高麗郡

明雅仏

川音を連れ月の客人

かりん

太刀魚の鈍な身を捌きみて

将義

子らと凶鑑の夏操りをり

遊民

ウ グローバル株価円ドル響きあふ

久美子

結婚式場はやる海外

守男

裏口に張り込んでゐる美人記者

同

関係ないツと切り返す癖

民

ゆつくりと枯れて野となれ山となれ

義

ちんをして酌む微温め爛酒

久

ナオ 地下鉄が雨に濡れるといふことも

義

病院多し北と南に

久

五つ児も恋して今やパパとママ

男

三つ巴なる不倫短夜

久

電流を食ひつなぐ街月暮し

義

神のお告げと水をセールス

民

ナウ 牛歩よりジョギングがよし胴囲り

義

雛の起居どれも細やか

同

地謡の低く始まる花篝

民

幾つもの頬東風の撫でゆく

男

連衆 川名将義 内田遊民 副島久美子

近藤守男

「旅靴」

秋山志世子 捌

爽やかや黄金の留め金旅靴

明雅仏

栗名月のさし渡る門

志世子

文化祭受賞の言葉探しみて

路子

にっこりわらひ仰ぎ見る嬰

政志

ウ 酒煙草やつて百まで生きやうぞ

一枝

判じものめく若者の夢

如代

ケータイでうかど釣られし女の子

代

しみじみ歌ふ愛の賛歌を

志

高層の窓の隙間の虎落笛

路

寒茜背にサポーター行く

代

ナオ ころざし深き介護のヘルパーさん

世

きんぴら牛蒡ちよつと固すぎ

路

明和より続く老舗を受け継ぎて

枝

縫りつきたい羅の君

志

セレナード染む胸熱し夏の月

枝

ルビを頼りに読める小説

路

ナウ ぬひぐるみ抱いてゆらゆら揺り椅子に

代

山の想ひ出語るうららか

志

高らかに同唱十念花の寺

路

鎌倉彫りの仕事場に蝶

枝

連衆 倉本路子 峯田政志 西田一枝

伊勢本如代

「水の秋」

染谷佳子 捌

水の秋昔深川橋幾つ

明雅仏

種ふつくりと垣の篝

佳子

夕月に文房四宝拵あげみて

郁子

子の掌にのせる飴玉

了斎

ウ きびきびと宅配便のドライブ

文子

起業が夢と語るまぶしさ

斎

恋の句も恋もわが師に学びたる

欣二

チュニスモロツコまでも追ひかけ

文

ミネレット遙か彼方に浮かぶ影

郁

脚の一本ゆるむ籐椅子

文

ナオ 炎風に萎へゆく力芝を踏み

二

ぱつくん首相と仇名賜る

文

アジアでものび太に似ると人気とか

斎

深きまなざし角巻の内

二

秘するほど熱き閨ごと雪月夜

斎

鐘の響きに驚かれぬる

文

ナウ 停年後犬の散歩が楽しみで

郁

糸のごとくに白酒をつぐ

斎

からくりの屋台出揃ふ花の中

之

誘ひ合せてうらかな旅

郁

連衆 東 郁子 鈴木了斎 橘 文子

諏訪欣二

「秋の声」

小池啓子 捌

紙剪れば紙にも秋の声生まる 明雅仏
林檎のうさぎ皿に三匹 啓子
月の夜櫓田そぞろ歩くらん 吉文
肩車の子の足を押へて 有子

「割り箸と楊枝」

梅田 實 捌

割り箸と語る楊枝の夜長かな 明雅仏
月は中天渡る雁 實
ドラフトに指名の笑顔爽やかに 常義
丸テーブルに咬る珈琲 淳子

「鳥海が」

林 鐵男 捌

鳥海が覗くまほろば稲の秋 明雅仏
慕って虫のすだく足元 鐵男
肩ならべ新酒酌み交う月の座に 良子
料理雑誌の記事をメモする 千恵子

ウ どつと混む耳鼻咽喉科開業医

孝子

ウ 音読に発声練習怠らず

央子

ウ 古い血液型をみてみよう

わこ

「Newton」 「Nature」 机いっばい 弘子

同

いい人だけど何時もKY
付文に時候の挨拶ながながと

蓉子

枯葦の河を二人の乗った舟
彼はミイラに出エジプト記

ジョウ

山脈を越えやって来た嫁 孝

同

藍染のごと本日晴天
息白く川中島に対峙せる

央

夏の空驢馬がゴミ引き坂に行く
暑中休暇の倦怠の午後

良

聖樹の下に献金を受け 有

吉

厄を落として今米寿なり

央

ウ オ音を消すTV画面のきらきらと
ODAで出来た学校

ウ

ナオ 浄水器戦地へ贈るNPO

吉

ナオ 面打ちの後継なきを嘆きみて
改造内閣多い二代目

淳

知恵の輪をほどく秘訣を伝授せん
鞭の指とくにむずむず

男

老鶴匠ひと仕事終へ仰ぐ月 弘

有

ゴシップの針小棒大週刊誌
スリット深く短夜の闇

同

凍月に焦れてこがれて身をほそり
道行の影響く三味の音

良

女の弟子の芳しき汗 有

孝

恋の道涼しき月に影もつれ
声若々し新発意の経

淳

ウ 石の艶石工ほれば撫でさする
雪代山女湯の宿の膳

ウ

尼寺の鐘の怨みは儚かり 吉

有

ナウ ミクロンの日毎に海面上昇す
沖の鳥島主寄居虫

義

花尋ね行脚の牧野富太郎
夢の異次元初虹の中

男

ナウ めがねかけリュック背負ひてアキバ族 有

吉

車座になり食べる草餅
花の土堤ほんぼん船の廻る

啓

両手開いて発たす蝶々

啓

花の土堤ほんぼん船の廻る 啓

有

もてなしに酔ふ春は關

執筆

連衆 永田吉文 佐々木有子 坂本孝子

わ

両手開いて発たす蝶々 弘

有

連衆 生田日常義 上月淳子 遠藤央子

義

連衆 本屋良子 鈴木千恵子 横山わこ

義

連衆 永田吉文 佐々木有子 坂本孝子

有

連衆 生田日常義 上月淳子 遠藤央子

義

連衆 本屋良子 鈴木千恵子 横山わこ

義

連句と広報

北村良輔

私の仕事はパブリック・リレーションズ（広報・PR）です。クライアントである企業や自治体、大学などの組織体を広く世間に広めていくことを使命としています。長期的には、その組織体の理想的なあり方（アイデンティティ）をいかに世の中にわかってもらうか、その組織体が策定する事業計画に合わせ、広報計画を構築し、そこから詳細な広報活動を導き出します。短期的には、どれだけ新製品がメディアで取り上げられるとか、何回、組織体の活動が世の中で紹介されるかが強く求められます。このような情報発信をメディアに行うための資料がプレスリリースです。メディアに取り上げられるためには、そのリリースの切り口が大切になります。そこで、私たちPRマンは、情報の本質をさまざまな角度で磨きながら、提案し、クライアントと二人三脚で完成させていきます。そして、そうして作り上げたプレスリリースや資料を携え、私たちマンは記者や編集者のもとへ向かうわけです。このようなメディア・リレーションの現場において、実は連句の座の考え方が活きるのです。様々な考え方や体験、環境にある方々が一堂に会しながら、一つの俳諧を創り上げていく。このコミュニケーションとクリエイション、そして、座に居る一人ひとりを活かしながら捌きを進めるといふ、真のマネージメント能力が要求される連句の

座こそ、理想的な広報・PRの形そのものであると思えるのです。発信した情報を「記事」とするために、さまざまな記者や編集者に採られながら、一つの記事を作り上げていく過程こそ、連句一巻を巻いていくことと同じ醍醐味があります。このように、私の仕事において、連句の座でご教示いただくあれこれにまさに生きて参ります。残業や休日出勤の毎日で、なかなか座に加わることができないですが、少ない機会においても、連句の座が私に教えてくれているものの大きさを実感する日々です。今後とも皆様どうぞご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

私に吹いた風

佐古英子

一説によると、あの「千の風になつて」は佛教には無い、クルルな死生観だと言う。風は風でも、私の場合書道との因縁が深い。空海が最澄に宛てた書状三通を総称して「風信帖」と呼ぶ。風信雲暮で始まる一通と、「忽披帖」「忽恵帖」が一巻に纏められ、国宝として東寺に收藏されている。頂戴物の礼を述べながら、多忙を理由に叡山招聘を断り、唐書借用にもそっけない。最澄が所望した「仁王経」を貸し渋った返信が「忽恵帖」。軋轢を生む原因となった曰く付きの下りを、私は条幅に臨書。所属する東京

吟芝会の展覧会に出品することにした。

「仁王経寺。備講師將去未レ還。後日親將去奉呈。莫レ責莫レ責也。」

芝・増上寺で小川東洲先生（ハーバード大学客員教授、ボストン美術大学教授）にお見せしたら、「奉の字がまずい。開催中の東寺展で見えて来なさい。」とのご指示。稽古もそこそこ世田谷美術館へ急いだ。

唐で見聞した書法を基に、墨跡の気品、平安朝三筆の雅さが匂い立ち、私信とは言え、空海ならではの面貌が輝いていた。

奉の字もどうやら。平成七年十月銀座清月堂ギャラリーに搬入。ご健在だった東 明雅先生が来場され、「風信帖」と創作をご覧下さった。「書道を始めたのはいつ？ 連句の方が古いのだね」と話されたのが印象に残る。その一週間後に巻いたのが次の表合せ六句。

柿くへば膾の味や母の味 好敏
月に照らさる邪な恋 茂
猿酒に狂ひし男止めがてに 明雅
莫責と書きし空海 英子
ポトマック河畔明るき花万朶 茂
バラモン風を揚ぐる園児ら 明雅
翌平成八年一月、拙宅に明雅先生ご夫妻をお招きし、電通の連衆を交えて歌仙を巻いた大寒や床の一軸「風信帖」

海の幸鍋金目魴鱈 英子
公園の野点のあとの賑やかに 郁子

明雅先生の発句から終日楽しい句座となった。話は飛んで昨年春、東洲先生がオランダ・ライデン大学及び王立美術アカデミーの日本学部・美術学部系の学生を対象に講座を持たれた。我々一門の展覧会も実現。手伝いを兼ねて、有志共々現地向かった。

講座の山場は実技。墨磨り・運筆・側筆の働きを実体験。レンブランド誕生の地に学ぶだけに、皆立ち所に書の妙を会得。門・道・風等の課題から空海の風を選んだ青年に、私はおこがましくもポイントを教示。風車を連想してか堂々と仕上がった。彼等の展覧会がシーボルトハウスで開かれたとか。好青年達との交流は、計り知れない旅の成果だった。

封人？の家

川名将義

平成十九年九月七日正午過ぎ、山形県新庄市の「新庄市民プラザ」。おりしもその上空を台風が目が通過しつつあり、刻刻ともたらされる情報も、最後には新幹線、在来線、そして高速バスと全ての交通機関が不通という惨憺たる状況であった。今日中に仙台市へ着かなければ、明日からの仙台発の三陸海岸の旅に参加できなくなってしまう。そんなボヤキが口について出てしまった。するとそれを聞きとめた、連句実作の同じ席の連衆で、仙台から参加しておられた筒井草平さんが、「それはお困りでしょう。よかつたら古川市

回りになりますが、仙台まで車で帰るし、席が一つ空いているので、乗せて行ってあげますよ」と、救いの手を差し伸べてくださった。午後三時過ぎに車は新庄市民プラザを出発し、風雨の中を古川へと向かい、R47を険しい山の中へと進んで行った。三〇四〇分ほど走った頃、筒井さんが「そろそろ封人の家の前を通りますよ」と話しかけてくださった。

「封人？の家？？」と聞き返すと、「そうですよ、あの『蚤虱馬の尿する枕もと』と芭蕉が詠んだ家ですよ」と即座に申される。無知な私は「でも芭蕉と曾良は、あの句のような悪環境の、百姓家の厩に泊められたんじゃないかったの？」と思わず胸の中で呟いていた。ほどなく車は封人の家の前にさしかかり、R47に面しているその家の前で一時停車してくださった。三五〇年前当時の姿そのままに保存された封人の家は、萱で葺かれた屋根の、想像していたよりかなり立派な家であった。

「奥の細道」を未だに読んでいない、怠慢連句人の当方の拙い情報を集めたところでは、「封人」と言うのは国境の守り役のことを言うそうである。この地は仙台領と境を接する新庄領田村と言うところで、代々この庄屋であった有路家が封人の役も担っていたのである。元禄二年旧暦の五月十五日に芭蕉一行はこの地に入った。折悪しく今日のような風雨激しき日であり、

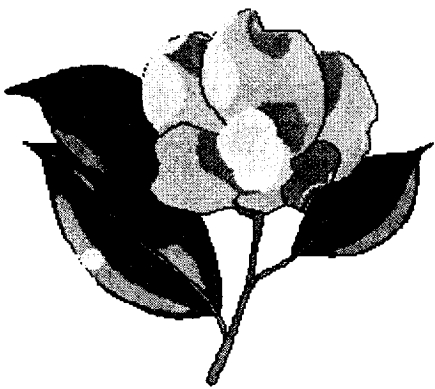
大山を登って日すでに暮れければ

封人の家を見かけて宿を求む

三日風雨荒れてよしなき山中に逗留す
と芭蕉は「奥の細道」に記している。芭蕉は一泊どころか、蚤虱の悪環境に二泊することを余儀なくされてしまったようである。三日目に芭蕉たちは、有路家から道案内の若者をつけてもらい（もちろん有料で）、難所の山刀伐峠を越え、尾花沢の鈴木家を尋ねて行ったのである。それはその先の、芭蕉がどうしても訪れたかった、象潟へ行くために。そして

象潟や雨に西施がねぶの花

の名句を我々に残してくれるために……芭蕉と同じ悪天候のルートを、徒歩でなく、快適な車で逆に辿った私達は、封人の家から一時間後には、仙台駅前に無事到着した。また一つ勉強をした旅であった。



連句と私

小野芳梅

「連句」なる言葉と出会って十年。言葉というのも可笑しいが、公民館の案内に「おしやべり連句講座」の文字を見つければ、「連句ってなんだろう」と思つて受講したのが初めである。以来、これも連句会とインターネット連句KUSARI、それに榮連句サロンに参加して今日に至っている。

四年程前に榮連句サロンがスタートして、連句十四巻を巻きながら付けと転じを理解していただく捌き役をお引き受けした。それまで数度捌いたきりで、まだ式目にも不安のあった私の冒険である。年長の方々に前にした戸惑いと良い作品に仕上げたい一心から、かなり深刻な座に終わったことも多い。ため息がもれ、沈黙の時間を過ごして、挙句が決まると一堂ホツとするのだ。しかし熱心な連衆のお力添えで、なんとか半歌仙も明るく巻けるようになってきた。

今年初めて国民文化祭に向き、徳島のお困柄と実作会を楽しませていただいた。

手慣れた捌がその折に仰つておられた「悩まない、悩まない。発想・転じ・流れです。字面のみではなく、聞いてわかることも大事です。」のお言葉を忘れられないでいる。

まさに一座の興。「連句は人の和を作る」

であり、斯くありたいと思う。

(人妻を口説いてくれてありがとう)

まだ赤なのに走り出しそう

これはオツカナビツクリ出した私の処女付け句であり、未だにこの短冊はすてられない。以後十年、前句に付ける緊張感と上手く転じられた充実感ゆえに私は連句を続けていると思つてきた。座の共感と連帯、捌の手腕で如何様にも流れ、連衆の発想しだいで先の読めない面白さがたまらない。しかし、「連句のご縁」に支えられている自分を、この頃改めて感じるようにもなった。連句を通して色々な方と出会い、お教え頂いたことも数多い。流れにまかせた人生の中で、これからも肩の力を抜いて連句と向き合っていきたい。

村田富美さんを偲んで

長崎和代

ACCに入会して間のない頃、故秋元先生に「村田富美さん、私達の先輩よ」と紹介されました。学校の先輩と聞くと、重圧感でたじろぐ思いでしたが、もの言いのふんわりと柔らかい静かな方でした。

学校時代は地理が一番得意だったそうで、あちこち旅のお供をする様になりました。旅の行程、電車の時間、宿の手配まで綿密に計画を立てて下さり楽な旅でした。電車の時間

が決まれば席は別々、宿はシングルと言うのがいつもの事でした。最後の長旅は佐渡島。沈んで行く夕日を無言で眺めた時の事忘れることが出来ません。

神楽坂連句会の折はお昼を一緒にするのが恒例でした。十八年秋、何気ない会話の中で「俳句やら、連句やら、十分楽しませて貰いました。主人にはなにかと不自由な思いをさせてしまいましたから、そろそろ家に落着こうと考えているのよ」とおっしゃいました。

暫くして寒雷系の俳誌も・猫養会へも脱会届を出されたと同じ、決断の早さ実行力、とても真似の出来るものではないとびっくり致しました。後日ご主人様からのお便りによりますと十一月半ばから検査入院、手術、治療と経過を辿る訳ですから、お家に入る決心をなさった頃何か予感があったのでしょうか。ちなみに常日頃、事あるたびに、「私達の葬儀は家族のみで」と話し合っておられたそうです。又その日を覚悟しての整理、折々の綿密なメモ等処分し難い程見事なものであったとの事でした。

ここまで書いてまいりますと、優等生で良妻賢母の鏡な方とお堅い方と思われ勝ですが、どうして、どうして時に声をひそめて本音を吐露したり、片目をつぶって覗き合ったり、笑いこぼしたり、又とない先輩でした。

悼 村田眞美様

冬の旅

長崎和代 捌

冬の旅往きも帰りも海を見て

富美佛

さざれ波立ち鶴渡る頃

長崎和代

語りつつ古きアルバムめくるらん

倉本路子

CDカセットスイッチをON

橋 文子

日路はるか山のあなたのしるき月

五味蓉子

野ぶどうの實の影の斑に

高橋豊吏

さあさあ始めませうぞ村芝居

まっぴらごめんと注ぐ大盃

路

ハウスメイドの青エプロンの端を引き

盗んだ愛を包む風呂敷

蓉

谷中から弃天の池ふたり連れ

一瞥くれしかたはらの薔薇

鈴木美奈子

月のしたさうめん流しのうからどち

餌をねらつて身じろがぬ猫

路

老舗でも少し危ふし吉と福

多忙きはめる仮説検証

文

ポアンカレ予想解けたり巴里は花

牧羊神の箏笛を吹く

奈

ナオ子に聞かすお伽話に暮遅し

トロリーバスに乗つてお使ひ

代

スーパ一の点数貯まりエコバック

与野党々首民意忘却

蓉

建白の船中八策認めて

スモッグ透かし君の煌めき

豊

奈

奈

挿巻を深くかぶりて寝もやらす

全て消去す恋の遍歴

モツアレラとぶぶ漬さらさらワルム

メジャーリーグにイチローの在り

銀やんまどこまでも追ふ小田の里

月待つ客の膝を揃へて

ナリ御秘蔵の榎櫃の酒の香りたつ

アウトレットで決めるファッション

六十秒電車で学ぶミニ講座

細くたをやか水くきのあと

花浴びて折目正しきたたづまひ

春の夢にも偲ぶ面影

平成十九年十一月十二日

於 新宿消費生活センター

悼 卯遊庵志げ子様
悼 田村満子様

三回忌追善 俤や

橋 文子 捌

俤や山茶花ほろと零れつぐ

橋 文子

紫煙ゆらゆら冬ぬき部屋

古藤一郎

スーパ一の新装開店待ちわびて

橋野代々子

駐車整理のをちさんの笛

大窪瑞枝

月の下道を横切るかまどうま

松本 碧

栗飯炊いて遅き夕食

松原弘子

気配りの献盃となる今年酒

加藤亀女

龍馬パワーを蘇らせん

文

幼な妻財務管理は強かに

郎

これみよがしに腰高の脚
出囃子を弾いて師匠の羽織引き

一言主は葛城の徑

村宮のプールに浮かぶ青き月

赤海亀の旅を見送る

思ひ出の数々たどり夢辿り

リハビリ励み爺は退院

咲き満てる花写メールで送る人

鞆揺れる胡洞の奥

ナオ霞立つ万里長城尋ねゆく

孫に購う手乗文鳥

お蔵よりゼンマイ仕掛けの古玩具

「どげんかせんといかん」この国

大詐欺師まことしやかに数珠かけ

愛しの妹よとくるむ裘

里内裏女御は咳にやつれゆき

アダムとイヴも勝てぬ年次

精神力鍛へむとする夏休

限界集落水場守るか

桂男も読むベストセラ―文庫版

句碑見上げれば秋思あらたに

ナリ草相撲父と息子は四つに組み

やつと出来たる琴の調弦

奥絵師の絵画を鑑賞するツア―

留学生連れ鈍行に乗る

鳩の湖左手に受ける花吹雪

勇みて跳ねる牧の若駒

平成十九年十二月五日
於 鎌倉 おんめ様

代 枝 碧 弘 女 文 郎 代 枝 碧 弘 女 文 郎 代 枝 碧 弘 女 文 郎

事務局便り

ホームページについてのお問い合わせは
担当の横井士郎さん宛にお願い致します。

「猫養会ホームページ閲覧上の注意」

Yahoo!で「猫養会」を検索すると、「猫養会について」や「猫養会ホームページ開設にあたって」が出て来ることがあります。それらをクリックするとそこから他のホームページへ行くことができます。その場合はページの末尾にあるへ入口Vへ戻るVボタンをクリックして下さい。一旦「入口」ページへ戻ってから出直せばすべてのページへ行くことが出来ます。“お気に入り”にはこの「入口」ページを登録しておいて下さい。

なお、Google検索ではこの問題は生じません。また検索エンジンを通さずにURL (<http://nekominno.cool.ne.jp/>)を直接打ち込めば問題はありませぬ。

◇入賞おめでとうございます。

二〇〇七年国民文化祭とくしま

「臍より花」 鈴木千恵子

「春眠や」 鈴木了齋

「猫の恋」 登坂かりん

◇猫養会例会

亀戸天神正式俳諧

日 平成二十年四月二十五日頃

時 十二時より十七時(受付十時半より)

場所 亀戸天神社

江東区亀戸三六一

電話03-3681-0010

正式俳諧終了後二十韻興行

◇新会員紹介

竹村照代 茅野市在住

松原 昭 東京都世田谷区在住

小野雅美 ドイツ在住

飯島幸子 八王子市在住

◇電話の変更

鈴木千恵子 旧0424-23-7817

新042-423-7817

◇住所変更

中田あかり 〒153-0043

日黒区東山2-16-1-703

谷中様方

◇猫養基金にご協力有難うございました。

亀戸天神社様 一万円

諏訪欣二様 五千元

谷 晃一様 五千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通3376045

◇本年度の事務局委員を左記の方に委嘱致しました。

遠藤央子

佐々木有子

(敬称略)

季刊 『猫養通信』第七十号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二二二一十六

編集人 猫養通信編集部